仏像の膝

野村胡堂

一

「親分、怖い話があるんだが――」

ガラッ八の八五郎が、息を切らして飛込みました。桜の蕾もふくらんだ、ある麗かな春の日の昼少し前のこと――。

「脅かすなよ。いきなり、飛込んで来やがって」

銭形平次は鎌首をもたげました。相変らず日向に不景気な植木鉢をならべて、物の芽をなつかしんでいたのです。

「鉄砲ですぜ、親分」

八五郎はよっほど急いで来たらしく、まだ筋を立ててはものが言えません。

「鉄砲？　俺は、女房の方がよっほど怖いよ」

平次はそう言いながら女房のお静の方を振り返りました。

「まア」

陽炎が立つほど着物をひろげて、繕いに余念もないお静は、ツイ陽に薫じた顔をポーッと染めます。

「冗談じゃありませんよ、親分。通り三丁目に店を持っている釜屋半兵衛が、北新堀の家で鉄砲でやられたんだ」

「成程、そいつはうるさい事になりそうだな。行って見ようか、八」

平次はようやく神輿を挙げました。

その頃は幕府の取締りが厳重を極めて、大名が道具を揃えるのでさえ、鉄砲となると一々面倒な届出が必要とされ、一般人の江

戸持込みなどは全くできない時代ですから、鉄砲の人殺しなどという事件は、銭形平次の長い経験にも、曽てないほど珍らしいことだったのです。

二人が北新堀へ着いたのは昼少し過ぎ。霊岸島の滝五郎という土地の御用聞が、子分といっしょに朝っから詰め切って、御検屍前に下手人の目星でもつけようと、一生懸命の活躍をつづけている真っ最中でした。

「銭形の親分か、ちょうどいいところだ」

滝五郎はさり気なく迎えます。この素晴らしい競争者には、どうせ太刀打が出来ないと思ったのでしょう、眉宇のあいだに焦燥の稲妻は走りますが、でも、唇には愛想の良い微笑さえ浮びます。

「鉄砲でやられたそうじゃないか――滅多にないことだから、後学のため見ておきたい」

平次はこの大先輩と手柄争いをする気などは毛頭ありません。

釜屋の家族や奉公人たちは、すっかり怯えて遠くの方から眼を光らすだけ。その重っ苦しい空気の中を、滝五郎は、平次を案内しました。

「銭形の。この通りだ」

湊橋寄りに建った離室の、豪華を極めた一室を、滝五郎は縁側から指すのです。

この室の異様な飾りや、その調度の豪勢さには、平次もさすがに眼を見張るばかり、しばらくは死骸のあるのも忘れて、四方を見廻しました。和蘭風と言うか、平次には見当もつきませんが、畳の上に異様な模様を織り出した絨毯を敷いて、唐木の机、ギヤ

マンの鏡、金銀の珠玉に細工をした手廻りの小道具まで一介の町方御用聞の平次に取っては、生れて初めて見る品ばかりです。

「釜屋が抜け荷（密輸入）を扱うという噂がまんざら嘘じゃなかったんだね」

そっと後ろから囁くガラッ八を目顔で制して、

「フム、これはひどい」

平次は一歩死骸に近づきました。

緞子の夜具を少し踏みはだけ、天鵞絨の枕をはずして死んでいるのは、五十前後の脂切った男で、夥しい血潮を拭いたあたりには、首筋から胴へ撃ち込んだ弾丸の跡がマザマザと見えております。

「何処から撃ったんだろう？」

「あの通りさ――隣の部屋に鉄砲があるよ」

滝五郎の指した方、ちょうど死骸の枕元一間くらいのところ、金箔を置いた襖に指の先ほどの穴があいて、隣の部屋から午後の光線が明々と射しているのでした。

隣の部屋を覗いて見ると、そこはザラに見かける事のできない夥しい骨董を飾った広間で、畳敷にして十五畳ほどあるでしょうか。その向うにはもう一つ、六畳ほどの控えの間のあるのが、明け放した唐紙の先に見えております。

問題の鉄砲はその十五畳の隅においた、巨大な鎌倉らしい仏像の台座の下、見事な豹の皮の上にフンワリと落ちていますが、曲者は多分、唐紙越しに一発で主人を仕止め、鉄砲を投げ出して逃げうせたのでしょう。

仏像から、唐紙の穴まで三尺あまり、穴の縁が少し焦げている

ところを見ると、この位置から拳下(こぶしさが)りに撃ったもので、その工合は台の上に結跏趺坐(けっかふざ)した仏像が、膝だめに打っ放したものとしか思われません。

「不思議だ」

一生懸命首を捻(ひね)る平次の顔を、

「何が不思議なんで？　親分」

ガラッ八のキナ臭い鼻が下から覗きます。

「腑に落ちないことばかりだよ。唐紙の外から鉄砲を撃って、確かに人間が殺せる道理はないじゃないか。弾丸に眼があるわけはないぜ」

「――」

「それにこの鉄砲には火縄が仕掛けてないよ――曲者が鉄砲を撃った後で、火縄を外して逃げたとしか思われない」

「仏様が撃ったんじゃありませんか」

八五郎はこんな途方もないことを、ニヤリともせずに言うのを、平次も真面目に受け応えをするのです。

「俺もそれを考えているんだ。死骸の傷から真っすぐに、唐紙の穴を辿(たど)ってくると、ちょうど仏様の膝のあたりに来る――」

「冗談じゃないぜ。木で彫(ほ)って金箔(きんぱく)を置いた仏様が人殺しをするわけはねえ」

仰天したのは滝五郎です。

二

「鉄砲は和蘭物(オランダ)じゃないか」

平次は毛皮の上から鉄砲を取上げました。蒔絵(まきえ)も何んにもなく、真鍮(しんちゅう)やニッケルを使った精巧な出来は、そのころ九州や堺(さかい)の鍛冶が打った武骨――だが豪勢な感じのする日本出来の鉄砲ではなく、どうしても実用一点張りにそのくせ華奢に見よげに造った和蘭物でなければなりません。

「こんな品は、町人や百姓の家にあるわけはねえ。大名道具だぜ」

平次と滝五郎はそんな事を言いながら、なおも十五畳の部屋中を捜し廻りました。戸棚の中も押入も一々目を驚かす物で一パイ。何に使う品か、何をする品か、まるで見当が付かないものばかりです。

「こいつは何だ？　恐ろしく重いぜ」

八五郎が引張り出したのは、大きな唐櫃(からびつ)が一つ、蓋(ふた)を払うと、

「あッ、大変ッ」

中は小判で一パイ。何百両、何千両あるやら見当も付かない有様です。

「騒ぐな八。小判というものを見たことのない人間じゃあるまいし、見っともないじゃないか」

平次もその後ろから差覗いて、小首を傾(かたむ)けました。

「でも親分、これだけありゃ大抵の人間はうなされますよ」

ガラッ八の無駄口には答えず、小判の唐櫃を調べていた平次は、

「おや、それは何だい？」

小判の中に埋まった真っ黒な壺(つぼ)を取出しました。その蓋を開けると、壺一パイ詰ったのは黒々とした異様な品物です。

「変なものですね」

側で一服していたガラッ八も覗きました。

「危ないッ、八」
平次はいきなり八五郎を突き飛ばします。
「あッ、何をなさるんで、親分」
「煙管なんか咥えて覗く奴があるか。そいつは煙硝だよ。――火が移って見ろ、お前も俺たちも木ッ端微塵だぞ」
「へエ、これがねえ」
ガラッ八はただ呆気に取られるばかりでした。その頃はまだ一般人は火薬というものさえ見る機会が少なかったのです。
小判と火薬のほかに、鉛で作った鉄砲玉を充たした、鹿皮の袋も見付かりました。
「とにかく、家中の者に逢って見よう。下手人の目星をつけるのが先だ」
その中にも滝五郎は、岡っ引本能を働かせて、猟犬のように血の匂いに引き摺られて行くのでした。
「それも宜かろう。八、家中の者を纏めて置いて、一人ずつここへ呼び入れてくれ」
「へエー」
飛んで行った八五郎は何やら大きな声で指図をしている間に、平次は次の六畳に入って戸棚や押入の中をひと通り調べました。ここは隣の十五畳と打って変った簡素な部屋でひと通りの夜具布団と、誰が据えるのかお灸の道具があるだけ。
「へエ、親分さん方、御苦労様で」
最初に入って来たのは、八五郎の紹介によれば、番頭の伊八という五十男でした。ひどく線の太い、ノッソリした感じの人間で、どう見てもこれが有名な釜屋の支配人とは思えません。

「昨夜のことを詳しく話してくれ」
「詳しくと申しても、何んにも存じませんが、主人は宵から離屋に引籠って、大事な客があるからどんな事があっても誰も来てはならぬということで御座いました」
「昨夜に限ってそんなことを言ったのか」
「今までも時々そんな事がございました。大抵そんな時は、離屋へお客様で」
「昨夜も客があったんだな」
「へエー。立派なお武家様で、大藩の御留守居と言った方でございました。少し訛のある、四十前後の」
「それから」
平次は促しました。
「一刻ばかりお話になって、戌刻半（九時）頃お帰りになりました」
「何にか物を持って来なかったのか」
「重い物をお持ちで――。お供が三人外で待って居られました」
「それから」
「お客が帰るとお島さんを呼んで掃除をさせ疲れたからと仰有って一杯召し上がって、朝のうち忘れていた灸を据えさしたようで」
「お島さんというのは何だ？」
「召使いでございます」
「それから釜屋の身上の工合はどうだ？」
「私にはよくわかりません。万事主人がいたしますので、でも、大そうな、身上でございます」

この番頭は、恐らく何にも知らずに、店では丁稚や小僧を引廻して商売をやり、北新堀の家では用心棒とも秘書役ともなく勤めているのでしょう。

「もう一つ訊くが、この押入の唐櫃に隠してあった小判、支配人のお前は知っているだろうな。——あれは何処から入った金だ」

「それは初耳ですが、昨日までその唐櫃は空っぽでございました」

「何？　昨日まで空っぽ？　それは本当か」

「嘘を申しても仕様がございません」

伊八の言葉は至って自然で、何の作為があろうとも思われません。

三

「お前はお島というのだな」

「ハイ」

二人の前へ小さく坐ったのは、二十五六の淋しい女でした。顔形は端麗と言ってよく、道具の揃っていることは抜群ですが、血色がひどく悪い上に、愛嬌や世辞をどこかへ振り落したような無表情で、こう相対していても何となく、一種の圧迫を感ずるような、底の知れない淋しさが、ムラムラとこの女の身体から湧き起るのです。

「昨夜どんな事があったか、話してくれ」

「お客様がお帰りになりましたので、私が参ってお掃除をいたしますと、一杯召し上がると仰有って、ほんの一合ばかりつけて差上げましたが、毎朝据える灸を忘れていたが、肩が凝っていけな

いから、今からでもやってくれと仰有って、肩と、三里に据えて上げました。それからお床を伸べて亥刻（十時）少し過ぎに私は引取りましたが――」

お島の話はハキハキしております。

「離屋の戸締りは？」

「主人が御自分でなさいます。今朝辰刻（八時）過ぎになっても戸があかないので、番頭さんと小僧と二人がかりで雨戸を押し倒して入ると、あの始末でございました」

すると釜屋半兵衛は自分で締めた離屋の中で、姿の見えぬ曲者に、隣の部屋から鉄砲で撃ち殺され、曲者は戸の隙間からでも逃げ失せたことになります。

「ゆうべ鉄砲の音がした筈だが――」

「私が母屋へ引取って小半刻ほど経ってから何処からともなく恐ろしい音が聞えました。まさか鉄砲とは思いません。桜時でもあり、多分雷鳴だろうと、皆んなでそう申しながらそのまま寝んでしまいました」

「その音を聞いた時、母屋では皆んな顔が揃っていたのだな」

「ハイ、たいてい揃っていたようでございます」

「大抵？」

「御新造のお袖さんはまた、頭痛がすると仰有って、宵から、御自分の部屋に引籠りました」

「ところでお前の生国は何処だ？」

平次の問いは唐突でした。

「長崎で生れましたが」

「江戸へ来て何年になる」

「五年ほどになります」
お島の答えには何の淀(よど)みもありません。
「そんな事でよかろう。そのお袖さんとやらも呼んでくれ」
お島は黙って引下がりました。その後姿が見えなくなると、何処から出て来たか、ガラッ八の物々しい顔が、
「若旦那の初太郎の嫁のお袖が、殺された舅(しゅうと)の半兵衛の気に入らなくて、出すの引くのと言っていたそうですよ」
こう平次の耳に囁きます。
「ウムそんな事がありそうだと思ったよ」
「尤(もっと)も若旦那の初太郎はそんな事があれば女房といっしょに家を出ると言って居たそうで」
そんな事を言っているところへ、嫁のお袖が出て来ました。二十一というにしては、少し初々(ういうい)しく、健康で明るくて、心配も愁(うれ)いも利かない姿ですが、それだけ愛嬌者で、誰にでも好かれそうな女です。
若さと恥かしさと、恐ろしさにさいなまれて、何を訊いてもはかばかしい答えはありませんが、舅半兵衛(しゅうと)との仲はあまりよくなかったらしく、突っ込んで訊くと――
「どうせ至らない私ですから――」
と涙ぐむばかりです。そうかと言って、急にこの家を出るという話ではなかったらしく、昨夜のことは、お島や伊八の話と符節(ふせつ)を合せたように同じです。
「ゆうべ頭痛がすると言って、早く部屋へ引取ったというではないか――」
「え、どうにも我慢が出来ませんでした」

「部屋から外へは出なかったのか」
滝五郎が口を容れました。
「え」
無造作にうなずきます。
若旦那の初太郎というのは、二十三四の好い男ですが、父親の半兵衛の鋭さ、強かさとは似もつかぬ典型的な坊ちゃんで、何を訊いてもお袖以上に埒があきません。色白で、華奢で、少し吃りで、女房大事というほかには欲も意地もないような姿を見ると、独り者を見得にしているガラッ八は、すっかり気を悪くして、縁側からペッペッと唾ばかり吐き散らしております。

四

「銭形の親分、下手人の見当は？」
ひとわたり調べが済むと、待ち構えたように、滝五郎は言うのでした。
「困ったことに少しも判らない」
平次は頭を振りました。三十をやっと越したばかりの苦味走った顔に、深々と憂鬱な皺を刻みます。
「あの嫁が変じゃないか」
「戸締りの厳重な離室に入れるわけはない——入っても、出る工夫はない」
「すると？」
「下手人は仏様より外にない——あの木彫りの仏像が鉄砲を膝だめにして、唐紙越しに釜屋半兵衛を殺した——と見るほかはない」

「そんな馬鹿なことが――」

滝五郎は一応笑い飛ばしましたが、曲者の逃げ道が分らないと、仏様を下手人にするほかはありません。

「それより大変なことがあるかも知れない。八、ゆうべ離屋へ来たお武家の身許が判る工夫はないか。店中の者は言うまでもなく、近所の衆へ訊いてくれ。供の者が三人で何千両という金を持って来た筈だ。提灯の紋(もん)とか、お供の絆纏(はんてん)とか、何にか目印があるだろう」

「へエ――」

八五郎は飛んで行きました。その後で平次はもういちど支配人の伊八に逢って近頃の大きな取引から、荷の入り工合、手紙のやり取りなど念入りに訊ねましたが、ずいぶん念入りに秘密が保(たも)たれたらしく、昨夜の武家の身許を暗示するものは一つもありません。

「親分、驚いたの驚かないの」

まもなく八五郎が戻って来ました。

「何を驚くんだ？」

「ゆうべのお供ですよ。提灯は手拭で鉢巻をさせて紋所を隠してあったし、供の者の絆纏(はんてん)は皆んな裏返しに着ていたそうで」

「企(たくら)みは深いな」

こう聞くと、相手の容易ならぬ用心に、平次と雖(いえど)も手の下しようがありません。

「昨夜の武家が臭いというのか」

滝五郎に取っては、平次が昨夜の武家にばかりこだわっているのが気に入らなかったのでしょう。

「容易ならぬことがあったらしいよ。俺は何んとかして、その武家の身許が知りたい」

「武家は戌刻半には帰っているぜ。鉄砲の音のしたのは、それから一刻も後だ。箱のように念入りに戸締りをした離屋に忍び込んで、鉄砲で人を殺して逃げる工夫はあるまい」

「その通りだよ、滝五郎親分」

平次はそれ以上に争う意志がないらしく、滝五郎の不服らしい顔にも構わず、何やら、考え込むのでした。

その日のうちに検屍が済んで、次第に弔問の客も多くなりましたが、平次は伊八に注意して、五六人の僧を呼び、引っ切なしに経を読ませて、町内中に知れ渡るほどの、最も盛大なお通夜を営ませました。

「許せよ」

その晩戌刻半頃、生暖かいのに覆面をした一人の武家が、三人の供をつれて釜屋の入口に立ちました。

「へエ、入らっしゃいまし。どなた様で？」

門口へ出たのは、三十前後の若い男――それは銭形平次の、番頭になり済した姿だったことは言うまでもありません。

「拙者は昨夜参った者だが――姓名は申すわけに参らぬ――。昨夜の約束の品を受取り度い」

釜屋の様子の唯ならぬに、武家は何んとなく心憶れた様子です。

「どんなお約束か存じませんが、主人半兵衛は昨夜急に亡くなりました。御覧の通り今晩は通夜でございます、へエ――。いずれ改めて御挨拶に罷り出ます。お名前と御屋敷を、承わって置けば――」

©2017 萩 柚月

「それが申されぬのじゃ。噂には聞いたが、主人半兵衛は、やはり亡くなったのじゃな」

「へエ」

「それは困った」

武家は全く困り果てた様子です。

「大抵のことは、私で相分るかと存じます。そのお約束とやらを、仰有って下されば」

「されば――」

武家は言おうとして、フト口を緘(つぐ)みました。番頭に化けた平次の調子のさり気ないのに似ずその眼もその態度も、一寸一分の隙もないばかりか、闘志が全身に溢(あふ)れて、烈々と人に迫るものがあったのです。

「いや其方(そのほう)に申してもわかるまい。主人半兵衛が案内してくれる

筈であったが、拙者でも分らぬことはあるまい。――ところで、店の名前の入った提灯を一つ借りたい」

「へエお安いことで、暫く、御待ちを」

平次は小僧に言い付けると、釜屋の名の入った提灯を一つ取出させ、灯りまで入れて貸してやりました。

「これで宜しゅうございますか」

「辱けない、それでは借りて行くぞ」

町の闇に消え込む武家、外に三人の供と大八車が二台、轍の音を殺して静かに静かに後を追います。

五

覆面の武家と三人の供と、二台の大八車が鉄砲州稲荷の裏まで来ると、ピタリと立ち停りました。

夜はもう亥刻半過ぎ。四方は漆の如く真っ暗で、早春の香ばしい風が生暖かく吹いて来ますが、町も水も妙に静まり返って、夜の無気味さだけが、犇々と背に迫ります。

「般頭、船頭」

「へエー」

予て約束があったものか、稲荷橋下にもやっている一艘の伝馬から、一人の船頭がヌッと身を起しました。

「釜屋から参った。約束の品を引渡してくれ」

「確かに釜屋でしょうな。間違いがあると困りますが」

「それは大丈夫だ。この通り提灯を持っている――それにこの取引は誰も知らぬことだ」

「それじゃお渡し申しますよ。――五梃ずつ菰へ包んであるが」
「よしよし」
二人の船頭が船の中から取出して渡す菰包が二十。それを陸に
いる三人の供の者が受取って二台の大八車に積むと、覆面の武家
に護られて、永代橋の方へサッと引揚げます。
やがて車は大川端へ出た頃。
「待て待て後ろから跟けて来る者がある」
覆面の武家は立止って暗の中を透します。
「旦那、私でございます」
「あ、釜屋の番頭か、びっくりしたよ」
武家は何にか知らホッとした様子です。
「お気の毒様ですが、その荷物をお渡し申すわけには参りません」
「何？」
「お上のお指図でございます。恐れ入りますが釜屋までお越しを
願います。その代り、小判三千両は、たしかに御返し申し上げま
す」
釜屋の番頭になり済した平次は、二台の大八車の梶棒を抑えて
屹となるのでした。
「え、今さら何を申す」
覆面の武士は、三人の供を後ろに追いやるように、刀の鯉口を
切って平次の前に立はだかったのです。
「旦那、鉄砲の売買は厳しい御法度でございますよ」
「何を馬鹿なッ」
事面倒と見たか、サッと抜いた一刀、用捨もなく平次に斬り付
けるのを、かい潜って、

「八、その車を頼むぞ」
「合点だ、親分」
闇の中から飛出したのは、八五郎、滝五郎始め、二三人の子分共。あっという間に三人の供を追っ払って、二台の大八車を分捕ってしまいました。
「汝(おの)れッ」
事の破れと見た覆面の武家、必死の勢いで平次に斬ってかかるのを、二三度は躱(かわ)しましたが、さすがに容易ならぬ腕前。大川の夜の水へギリギリまで追い詰められて、銭形平次も持て余し気味です。
「えッ、面倒」
サッと薙(な)いで来る太刀、辛くもかい潜った平次の手からは、得意の投げ銭が久し振りに飛びました。小さいが、目方のある四文銭。夜風を截(き)って武士の顎へ、額へ、鼻の頭へ。
「汝(おの)れッ」
畳みかけて襲う武家の手が、この不思議な武器に封じられてしばらく躊躇(ためら)う隙に、二台の大八車は獲物を積んだまま、ガラッ八と滝五郎に曳(ひ)かれて、八丁堀組屋敷の方へ一散に飛びます。

六

覆面の武家は逃しましたが、幸い二台の大八車は首尾よく組屋敷に引入れました。深夜ながら与力笹野新三郎、立会いの上検査をすると、和蘭(オランダ)物の鉄砲五梃ずつ菰(こも)に包んだのが二十包で百梃。磨きの真新しいのが灯の下に並べられるのを見ると、さすがに笹

野新三郎も息を呑みました。
「釜屋半兵衛が、和蘭人から仕入れた抜け荷の鉄砲百梃。長崎から江戸まで船で運んで来て、三千両の大金で大名方に売ったのに相違ございません。幸い途中で見付けましたが危ないことでございました――」
平次は今までの経緯をこまごまと説明したのです。
「その大名方は？　お名前は分らぬか」
「一向分りません。が、たった百梃の鉄砲で謀叛を企む筈もございません。たぶん物好きな大名方の買物でございましょう。このまま何事も知らぬ顔に過すのが、天下静謐のためと存じます」
「成程そんな事もあろう」
笹野新三郎はうなずきました。
平次の一行が八丁堀を引揚げたのはもう明け方。
「銭形の親分。百梃の鉄砲を見付けたのは上出来だったが、釜屋半兵衛殺しの下手人はどうなるんだ」
霊岸島の滝五郎は不足らしく言いました。
「釜屋殺しの下手人なら、分っているじゃないか、滝五郎親分」
平次は何の気取りもなく斯う言います。
「冗談だろう、銭形の」
「俺は鉄砲の方に夢中になっていたんだ――釜屋半兵衛殺しの下手人なら分っているよ。あのお島とか言う下女だ」
「え、あの女が下手人？　隣の部屋から主人を鉄砲で撃って、戸の隙間からでも逃出したというのかえ」
「まア。そう言ったわけさ。あの女には半兵衛を殺すだけの理由があったんだろう。あの晩半兵衛が一杯飲んで、灸を据えられて

ウトウトするのを見ると急に殺す気になったのだろう。隣の部屋には煙硝も弾丸も込めて先刻半兵衛が武家に見せた見本の鉄砲がある。お島はそれを仏様の膝の上に乗せ、唐紙越しに隣の部屋の主人の胸を撃つように仕掛けて鉄砲の火皿へ長い線香を一本、火の点いたまま立てたのさ。――主人の床はお島が敷くから、仏様の膝から拳下りに鉄砲の筒口を向けると、唐紙越しに半兵衛の胸を撃つことは、ちゃんと前から見当をつけて置いたんだろう」

平次の説明の奇怪さ。滝五郎もガラッ八も、黙って次を促しました。

「お島がそっと帰った後で、半兵衛は眼をさまして、中から雨戸を厳重に締めたんだろう。そんな事はときどきあった筈だ。隣の部屋の線香の匂いは、ツイ先刻灸を据えたばかりだから気が付かないのも無理はない。半兵衛はそのまま本当に寝入ったのだろう。それから四半刻ばかり経って、線香が燃え尽きると、鉄砲は独りでドンと鳴った。弾丸は寸分の狂いもなく、唐紙を突き抜けて、半兵衛の首筋から胴へ――」

「それほどよく分っているなら、なぜ教えてくれなかったんだ、銭形の親分」

と滝五郎。

「確かな証拠は一つもないよ。――それに相違ないと思っても、いざとなると人を縛るほどの証拠にはならない。――それに俺は鉄砲の方で夢中だったんだ。謀叛を企む大名などがあっては大変じゃないか。――尤も、謀叛でも企むほどの人間なら、江戸で鉄砲を買込むようなあんな間抜けな事はしないだろう。暇で仕様のない大名が、抜け荷の和蘭鉄砲を売込まれて、ツイ欲しくなったん

だろう。――気の毒なのはあの武家さ。鉄砲は横取りされ、三千両は戻らず、腹でも切らなきゃ宜いが」

「急ごうぜ銭形の。あのお島とか言うのが、まだ気が付かずに居るだろう」

滝五郎は足を早めました。この足で釜屋へ行って、有無を言わさずお島を縛る気だったのです。

だが、それは飛んだ当て違いでした。お島は一通の手紙を残して、昨夜のうちに家出し、どことも知れず姿を隠してしまったのです。

その手紙によると、――釜屋半兵衛は非常な悪人で、長崎にいる時分商いの利分のことから私の父親を殺し、江戸へ出て抜け荷で大儲をしていたが、明かに親の敵と分っていても、言い立てるほどの証拠もなく、それに女の細腕では、人一倍強かな魂と力を持った半兵衛を討ち取る望もなく、心ならずも折を狙って月日を過しているうち、昨夜という昨夜こそは、まことに千載一遇の時節到来、抜け荷の見本の鉄砲を借りて仇を討ったに相違はない。――仏の膝に鉄砲を抱かせたのは、せめて仏罰を当てたつもり、本懐を遂げた上はこのまま長崎に帰って、逃げも隠れもせずに、年取った一人の母親に仕えるつもり――と書いてあったのです。

「道理で無愛想な女だったぜ。俺はあんな女を見たこともねえ」

ガラッ八は拍子抜けのした滝五郎を慰め顔に言うのでした。

「親の敵でも討とうという女が、お前に白い歯などを見せるものか、ハッハッハッ」

平次も初めてカラカラと笑いました。

（編注）

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩　柚月

初出―「文藝讀物」昭和十九年三月号　文藝春秋社

底本―「銭形平次捕物全集」第八巻　河出書房　昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行　銭形倶楽部